巻頭言

王なる王

立教大学チャプレン　浪花　朋久

去る5月6日、英国のチャールズ国王の戴冠式がジャスティン・ウェルビー大主教（カンタベリー大主教）司式のもと、ウエストミンスター寺院で献げられました。この戴冠式のテーマは、「Called to Serve」（仕えるため召された）であり、長い歴史の中で受け継がれてきた伝統を重んじつつ、新しい要素が取り入れられた式となりました。その新しい要素には、式中に女性聖職者へ積極的な役割が初めて与えられたことや、式典の最後にキリスト教以外の他宗教の指導者たちが新国王に挨拶する演出があったことなどが挙げられます。チャールズ国王の母エリザベス2世の戴冠式が行われた1953年には、戴冠式で女性聖職者に役割が与えられませんでした。時が経ち、その考え方が進化したことで女性聖職者へ役割が与えられるようになり、他宗教を受け入れる姿勢へと変わった英国の教会と英国王室の柔軟さがここに表われているように思います。

今から2000年前、ユダヤの首都エルサレムに2つの行列が近づいていました。西からやってくる行列は武装した兵隊が列を作り、列の真ん中には兵隊に囲まれて美しい服を着た人物が馬に乗っています。その人物こそ、当時のユダヤ地方を統治していたローマの総督のピラトです。その行列が表しているように、ローマ帝国は武力によって人々を抑圧し、属州から多額の税金を徴収していました。人々はこのピラトの列を恐れ、歓迎できないという気持ちを抑えながら、ピラトをエルサレムへと迎え入れました。一方で東からも別の行列がエルサレムに近づいていました。ピラトの列とは違い、貧しい人々が列を成していたので、ある人は行列のために自分の上着を、またある人は葉っぱのついた枝をそれぞれ道に敷きました。行列の中央には列を成す人々と同じように、貧しい姿をした人物がロバに乗っています。この人物こそがイエス・キリストです。イエスの前後に列を成していた多くの村人たちは「ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。我らの父ダビデの来るべき国に、祝福があるように。いと高きところにホサナ。」と叫びます。貧しい人、苦しむ人、悲しむ人に寄り添うイエスがエルサレムにやって来たことに、人々は喜びを爆発させます。神様から与えられた権威と力を用いて人々に寄り添ったイエスと、武力によって人々を支配するローマ帝国の権力の違いがここに表れています。私たちが求めている真の王は、私たちの苦しみに寄り添ってくださる王なのです（新約聖書マルコによる福音書第11章1-11節参照）。

ジャスティン大主教はチャールズ国王の戴冠式の説教で、王の王であるキリストが全ての人々に仕えたことや、奉仕とは愛する行動であることを新国王をはじめとした人々に語りました。権力は一部の人間にしか与えられません。私たちが生きていて望むものは、権力よりも自分の苦しみや悲しみ、そして痛みを理解してもらえることです。力を持つ人が寄り添ってくれると勇気が与えられます。イエスは寄り添うことを誰よりも大切にされました。だからキリスト教はイエスを「王の王」と呼ぶのです。

私たちは国の王になることはできませんが、他人に寄り添う、目の前で苦しんでいる人、悲しんでいる人、痛みを抱えている人の話を聞くことはできます。そういった意味で、私たちは王の王に近づくことができるのです。そして誰もが王の王に近づけば、少なくとも皆さんの生活範囲内で平和な王国が実現できるはずです。立教での生活において、王の王であるイエスのように、人々に寄り添う大切さを感じることが多々あるかと思います。そして立教の門から外に出た立教生たちが、社会で多くの人々に寄り添う王の王の似姿を体現することができたなら、そこには素晴らしい未来が待っていることでしょう。